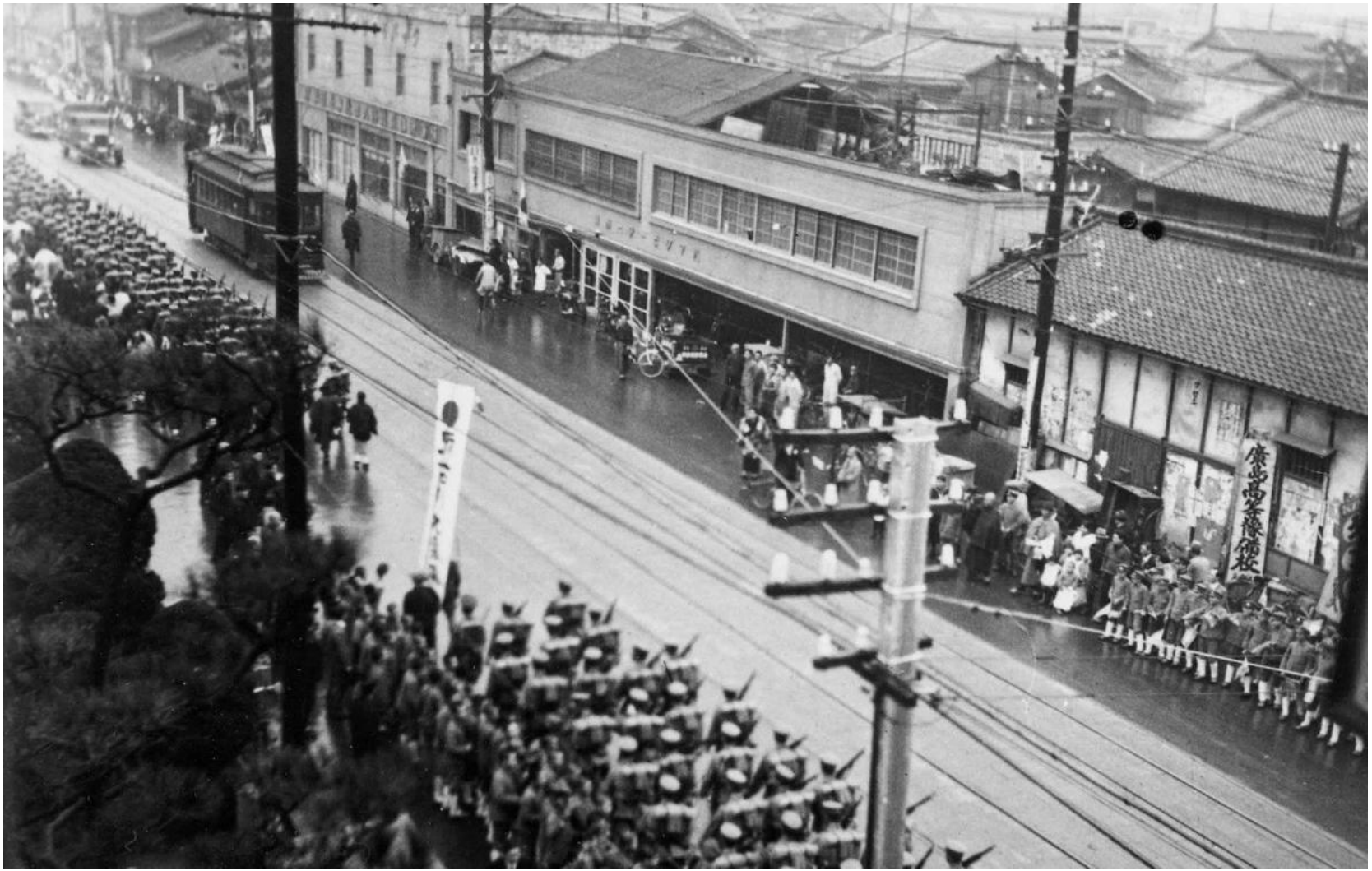
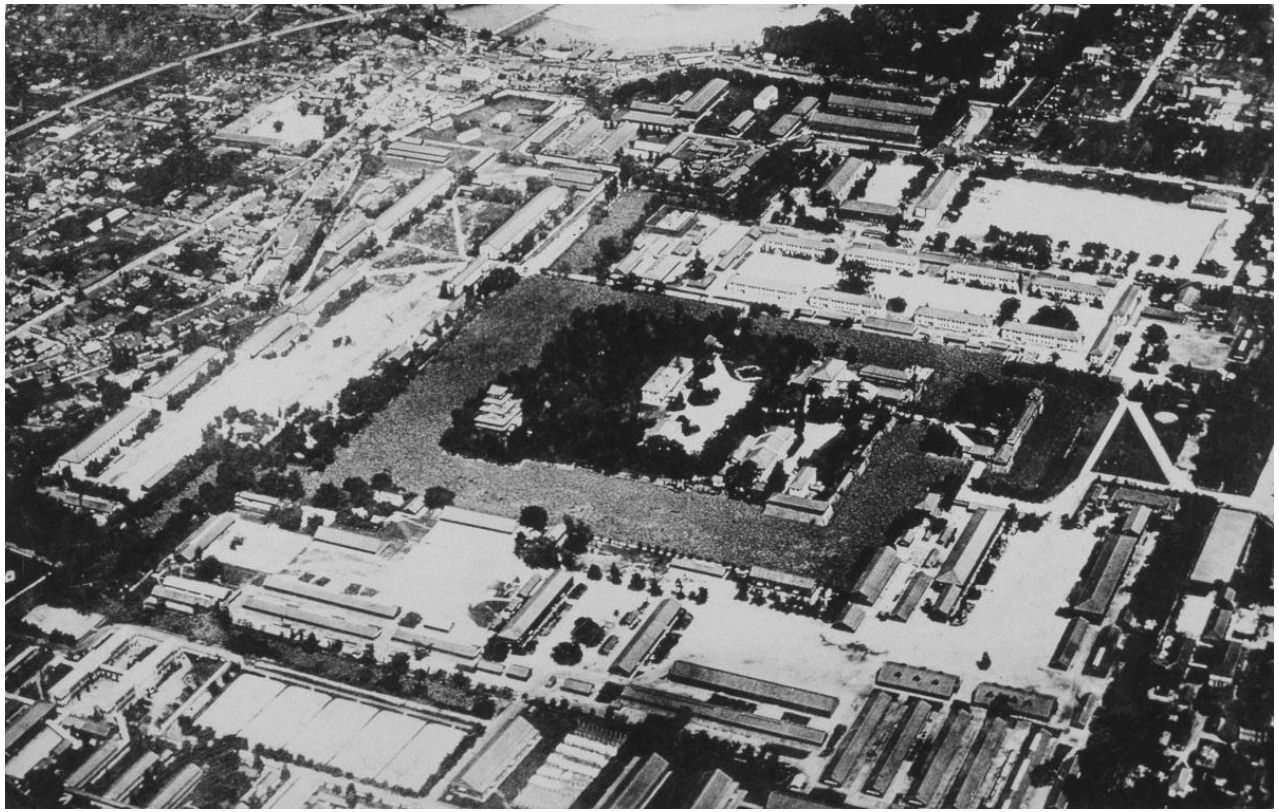
第３章　戦時下の広島



3-01　第五師団兵士と見送る市民。　広島電気本店ビル（後の中国電力本店ビル）から撮影　1936 年 4 月

戦時下の広島

日清戦争・日露戦争により、広島市内では軍事施設の新設・拡充が進み、広島城内には陸軍第五師団司令部が置かれ、主要な軍事施設は広島城・広島駅・宇品周辺に集中しました。太平洋戦争末期には、軍用地は市域の約10%に及びました。



3-02　軍事施設が集中した広島城一帯　1927年

被爆前の広島城には、本丸に史跡天守閣、旧大本営、旧昭憲皇后御座所と中国軍管区司令部、内堀の外には広島地区司令部、歩兵第一補充隊、砲兵補充隊、その周囲に西練兵場、中国憲兵隊司令部などが置かれていました。

3-03　後に中国軍管区司令部として使用された第五師団司令部の建物　1926年頃

1931（昭和6）年9月、関東軍が中国東北部の柳条湖で起こした鉄道爆破事件は、満州事変の発端となりました。

広島に拠点を置く第五師団や全国各地からの動員部隊が宇品港を出発し、市内では、町内会、学校などの単位で戦地に送られる兵士を見送りました。

3-04　宇品港に向かって行進する兵士　1932年

1937年、日中戦争が勃発すると、軍都広島の経済は軍需工場を中心に活況を呈していましたが、一方で戦局が悪化すると物不足が深刻になりました。1940年7月には、不急不用品・奢侈品として国が指定した物品の生産・製造・販売が禁止され、市内では11月に砂糖・マッチの切符制、12月には通帳による米の配給が開始されました。

1941年12月8日(ハワイでは12月7日)、日本軍はハワイ真珠湾を攻撃し、戦火はアジア・太平洋に一気に広がります。翌年2月には、衣料品・味噌醤油の切符制が、同年5月には、軍備のための鉄や銅資源確保を目的とする金属の回収が実施されました。配給制などが始まり、市民は耐久生活を強いられていきます。

3-05　「銅と鉄捧げて破れ包囲陣」　金属回収への協力を呼びかけるポスター

3-06　広島陸軍兵器補給廠で高射砲を整備する動員学徒
1940年代前半

1938年4月、国家総動員法が公布され、国民を強制的に重要産業等に就労させる国民徴用も始まりました。戦局が進むと、働き手が戦場に送られ、不足した労働力を補うため、学生や女性も軍の施設や兵器工場などに動員されました。

3-07　学徒動員先の東洋工業で旋盤作業に向かう広島女子商4年の生徒
1944年7月

戦争中、広島市や近郊には多数の朝鮮人が朝鮮半島内から強制的に動員(徴用)され、広島にやってきて三菱重工業広島造船所や東洋工業等で働きました。また中国本土から連行されて市外の発電所等で働く者もいました。

3-08　三菱重工業広島造船所に朝鮮半島から徴用された男性　1944年10月、広島護国神社

戦争により農家でも働き手が召集され、人手と肥料等が不足し、食糧生産量が大幅に減りました。戦争末期には、食糧不足はより深刻になり、食糧増産のため学校の校庭にも畑が作られ、子どもたちが耕しました。

3-09　幟町国民学校の校庭での畑づくり作業　1944 年

広島の街は、米軍の本土空襲が激化しても大規模な攻撃を免れていました。しかし、戦況の悪化で 1945 年 4 月、市内の国民学校初等科 3 年生から 6 年生の男女児童を対象にした学童疎開が始まります。県北や市周辺の寺院などで寝起きし、親きょうだいと離れた寂しさや、ひもじさに耐える日々が続きました。原爆で家族を失い孤児となる児童も多数出ました。

3-10　疎開先の寺院で面会に来た保護者と食事をとる幟町国民学校の児童　1945 年

市内では、空襲に備えたバケツリレー等の防火訓練や民家を取り壊して防火帯をつくる「建物疎開」などが行われました。

3-11　防火訓練のバケツリレー　1944 年　鷹野橋

広島市内の建物疎開は 1944 年 11 月の政府告示で始まり、翌年に本格化します。作業は市内町内会や職場、周辺町村からの国民義勇隊が家屋を解体し、中等学校や国民学校高等科の学徒隊ががれきなどの後片付けに当たりました。1945 年 8 月に入ると、国民義勇隊約 3 万人、学徒隊約 1 万 5 千人の連日出動が命じられ、遮るものもない屋外で作業に当たりました。

3-12　竹屋町での建物疎開作業を描いた市民の「原爆の絵」
家屋は、柱をのこぎりで切り、梁にロープをかけて引き倒して解体した